

# ヘミングウェイとムッソリーニ（1）

光 富 省 吾

## 序

ヘミングウェイと政治思想というテーマでは、主として個人の倫理が追究されてきたと考えられる『日はまた昇る（*The Sun Also Rises*）』（1926）と『武器よさらば（*A Farewell to Arms*）』（1929）という代表作を読む限り、社会のために生きるという思想は希薄と考えられる。『持つと持たざると（*To Have and Have Not*）』（1937）では不況時代のアメリカを舞台に社会主義的イデオロギーが見られ、『誰がために鐘は鳴る（*For Whom the Bell Tolls*）』（1940）では民主主義のために個を捨てるという思想は見られるものの、『老人と海（*The Old Man and the Sea*）』（1952）では社会から離れた個人の生き方が再び問われている。全体的にヘミングウェイ文学に政治思想を探すのは難しいと考えられる。

このようにフィクションの上では、社会に関心をもたない主人公が多いが、ヘミングウェイはジャーナリストとしては数多くの政治記事を書いていて、必ずしも社会の動向に無関心であったというわけではない。

『FBI ファイル：アーネスト・ヘミングウェイ（*FBI Files: Ernest Hemingway*）』によると、1940年代初頭までに、ヘミングウェイは共産党シンプアと見なされていたようである。<sup>注1</sup> ヘミングウェイ自身は1935年8月19日、

イワン・カシュキーン宛の手紙で、"I cannot be a communist now because I believe in only one thing: liberty." と語り、共産主義者であることを否定している (*Selected Letters* 419)。コブラーもヘミングウェイが Kommunismus もファシズムも支持しなかったと指摘している (81)。FBI の見解とヘミングウェイ自身のことには大きな開きがある。もちろん FBI の見方を鵜呑みにする必要はないのだが、共産主義の定義の仕方にもいろいろあり、ヘミングウェイが共産主義のシンパであったかどうかという問題は極めて微妙で、慎重な検討を要するであろう。

この機会を利用して、ヘミングウェイとファシズム、あるいはヘミングウェイとムッソリーニというテーマを追求してみたい。ヘミングウェイは生涯を通してファシズムに反対の立場をとっている。反ファシズムという点では『誰がために鐘は鳴る』などのスペイン内戦を描き出した作品が一般に研究の対象とされている。確かにファシズムに対する言及はスペイン内戦に関連するものが多い。しかし、「祖国は汝に何を訴えるか? ("Che Ti Dice la Patria?")」(1927) においてすでに反ファシズムの政治的立場を明らかにしているのである。この短編でムッソリーニ体制のイタリアの腐敗を描き出している。ヘミングウェイの政治意識を探る上で、ファシズムの問題を避けることはできないと考えて、この論文では、ヘミングウェイが「祖国は汝に何を訴えるか?」執筆に至るまでのプロセスを追う。特に今回はヘミングウェイがファシズムに接触し、政治思想を形成していくプロセスを追っていきたい。

## I ジェノヴァ会議のヘミングウェイ

第1次世界大戦の戦後補償と経済復興を主な議題とする一連の会議が開かれた。第1次世界大戦後ドイツから出された賠償モラトリアム要求を契機として、1921年12月のロンドン予備会議を経て、1922年1月6日から13日にかけて

フランスのカンヌで開かれた連合最高会議、カンヌ会議においては、賠償に  
関しては会議途中にフランスのブリアン内閣が崩壊したせいで、ほとんど成果  
なく終わり、ジェノヴァ会議に引き継がれる。1922年1月開催のカンヌ会議  
の決定に従って、1922年4月10日から5月19日までにイタリアのジェノヴァ  
で34カ国が参加して開かれた国際会議がジェノヴァ会議である。ドイツとロ  
シア革命後のソヴィエト連邦が初めて国際会議に招かれ、第一次世界大戦後の  
経済復興問題を中心に議論された。ヘミングウェイはこの会議取材して、  
『トロント・デイリー・スター』に、以下のような記事を掲載している。

1. 「カナダ、ロシアを容認 ("Canada's Recognition of Russia")」 (1922年4月10日号)：カナダがロシア（ソ連）をこれからのカナダの市場になると考えて、カナダ代表チャールズ・ゴードン卿が国家として容認する意向という内容。ソ連を新たな国家として容認するかどうかは、第1次世界大戦後の国際社会の大きな課題であった。ジェノヴァ会議の主な目的は経済復興問題であったが、世界中の注目を集めていたのは新生国家ソ連であった。
2. 「チチェーリン、ジェノヴァ会議で会見 ("Tchitcherin Speaks at Genoa Conference")」 (1922年4月10日号)：ロシア代表団がラパロに到着すると、ジャーナリストたちは皆ジェノヴァを離れて、ロシア団長チチェーリンにインタビューするためにラパロに集結した様子を伝えている。この記事もジェノヴァ会議の主役はソ連であることを伝えている。
3. 「イタリア首相 ("Italian Premier")」 (1922年4月10日号)：1921年11月から翌年2月までワシントンで開かれたワシントン会議（軍縮が主な議題）の精神をこの会議に吹き込むべきだと主張するイタリアの首相ファクタの開会演説を紹介している。
4. 「チチェーリン、日本排除を要望 ("Tchitcherin Wants Japan Excluded")」 (1922年4月11日号)：日本とルーマニアを会議の場から排除してほしいというチチェーリンの発言を伝えている。

5. 「ジェノヴァ会議 ("Genoa Conference")」(1922年4月13日号)：イタリア北部におけるソ連とイタリア国内の共産主義者対ファシストの暴力を交えた抗争とジェノヴァ会議においてその抗争を防ぐ目的で警備するイタリアの兵士たちの模様を報告している。共産主義者に対するファシストの暴力行使にはイタリア政府の暗黙の了解があり、ファシストの暴力がエスカレートしてきたので、ジェノヴァには憲兵隊が導入されて警備にあたる状況が伝えられている。
6. 「連合国案に反対 ("Objections to Allied Plan")」(1922年4月13日号)：ソ連が連合国案に反対する。
7. 「ロシアの要求 ("Russian Claims")」(1922年4月14日号)：ソ連のせいで会議が順調に進まなくなっている状況を伝える。
8. 「女性はパン屑を食べる ("Woman Takes Crumbs")」(1922年4月15日号)：ジェノヴァ会議には圧倒的に女性の出席者が少ない。ロシアのフェミニスト運動のリーダー、アレクサンドラ・コランティが会議の主要な役職に女性が入っていないことに反対したことを伝えている。ただしヘミングウェイは3人の女性が会議の場で活躍していることを報告している。1920年代に入って、女性の社会進出が活発になってきた情勢を伝えている。
9. 「ジェノヴァは平和会議に向けて掃除中 ("Genoa Scrubs Up for Peace Parley")」(1922年4月15日)：洗濯物を窓から外に出さないように片づけるなど、ジェノヴァの街全体がきれいに清掃されて、ジェノヴァ会議に備える市民の様子が伝えられている。
10. 「ジェノヴァ会議の通訳 ("Interpreters Make or Mar Speeches at Genoa Parley")」(1922年4月15日)：国際会議の通訳の重要性に関する報告。
11. 「会議進行はロシア次第 ("Russians Hold Up Progress")」(1922年4月17日号)：会議の進行はあくまでもソ連次第となっていることを伝える。さらに、国際社会で阻害されたソ連とドイツがラパロ条約で結束して、両国がベルサイユ体制に対抗していこうとする姿を生々しく伝えている。

12. 「ドイツ流のマキアヴェリニズム ("German Machiavellianism")」(1922年4月18日号)：ジェノヴァ会議がハリケーンに巻き込まれた船に喩えられ、ラパロ条約の締結が、連合国側からはドイツ流のマキアヴェリニズムと批判されている。

13. 「ドイツの裏切り ("German Blow-Disloyal?")」(1922年4月18日号)：これもラパロ条約の締結が主要国からは裏切り行為に映ることを伝えている。

14. 「バルトゥー審議拒否 ("Barthou Refuses Conference")」(1922年4月18日号)：フランス代表(当時法相)のバルトゥーが、ラパロ条約がベルサイユ条約を破るものだと非難し、もしロシアとドイツがラパロ条約を破棄しなければ、会議をボイコットすると表明したことを伝えている。この記事もラパロ条約締結の波紋を伝えている。フランスはイギリス首相ロイド・ジョージがソ連とドイツに条約を破棄するように働きかけることを期待し、イタリアは、対フランスでイギリスを支持し、ラパロ条約に公然と反対していることを伝えている。ヨーロッパの政治上の権力関係が見られる。

15. 「ジェノヴァ会議のロシア女性 ("Russian Girls at Genoa")」(1922年4月24日号)：ジェノヴァの会議場の紹介に続いて、ポーランド、セルビア、イギリス、カナダ、イタリアの代表の入場の模様を伝え、最後に入場してきたソ連代表とその秘書団について詳しく報告してある。秘書団の中の2人のロシア人美女の印象が余程強烈だったのか、短い記述にも関わらず、この記事のタイトルにしてある。

16. 「バルトゥー、チチェーリンに逆らう ("Barthou Crosses Hissing Tchitcherine")」(1922年4月24日号)：軍事力を備えたソ連が依然として世界の脅威であり、フランスは軍備を縮小しないというバルトゥーの演説を紹介している。

17. 「ブルガリアのスタンボリースキ ("Stambouliski of Bulgaria")」(1922年4月25日号)：第1次世界大戦の敗戦国ブルガリア首相スタンボリースキを

紹介している。スタンボリースキがブルガリア農民同盟の指導者で、親ドイツ政策をとる国王フェルディナンド1世と対立し、終身刑を受けたが、戦後首相となり、複雑なバルカン半島に関連する戦争にブルガリアが巻き込まれることを防ぎ、農業重視の政策をとるため、飢餓に苦しむ他のバルカン諸国に比べるとブルガリア国内はずっと充実していることを伝えている。

18. 「徹頭徹尾首相のショーバー ("Schober Every Inch a Chancellor")」(1922年4月26日号)：帝政オーストリアの警察トップで、戦後首相となり、警察権力を強化して、オーストリア国内の社会主義者とその対抗勢力、保守派との紛争を解決し、オーストリアの国際的信用獲得に成功したオーストリア首相ショーバーの紹介記事。

19. 「世間知らずのソ連代表 ("The Unworldly Russians")」(1922年4月27日号)：ロシア代表団のチチュエリン、ジョッフエ、クラシン、リトヴィーノフはどこか世間知らずといった風情であるのに対して、ロシアのマスコミ担当ローゼンバーグだけは別で、ヘミングウェイの記者としての中立性を明らかにしつつも、プレス・サービスの拙さを批判している。

20. 「ジェノヴァ会議のドイツ代表団 ("German Delegation at Genoa")」(1922年4月28日号)：もしドイツが戦争に勝っていたら、フランスを破壊し尽くしたかもしれないステイネスがジェノヴァ会議に参加せずに、思いやりのあるヴィルトと冷たく知的なラーテナウが出席することによって、ドイツは救われている状況を伝えている。

21. 「ジェノヴァの熱い入浴 ("A Hot Bath an Adventure in Genoa")」(1922年5月2日号)：やけどするくらい熱いイタリアの風呂に入って、ホテルのオーナーから死ななかつたのだから幸運だと言われた個人的体験をシニカルに伝えている。

22. 「護衛されたソ連代表団 ("Well-Guarded Russian Delegation")」(1922年5月4日号)：サンタ・マルグェリータのインペリアル・ホテルに滞在して

いるソ連代表団の厳重な警備の様子を伝えている。また、ヘミングウェイがホテルに入る入場を許可証を得て、ホテル内部の様子やチチェーリンとリトヴィーノフのロシア革命前の亡命生活を伝えている。

23. 「奇妙なドイツ人ジャーナリスト ("German Journalists a Strange Collection")」(1922年5月8日号)：ドイツ人のジャーナリストの中には何か事あれば電信機の前でニュースを送る他のジャーナリストとは異なり、弱々しく、一人で立っている、超然とした人物がいるかと思えば、いつもしかめっ面をして小さな拳で素早く記事を書く記者、髪の生え際が後退しつつある記者、ボブ・ヘアーのような髪形をした記者など様々であるが、4人ともニッカー・ボッカーズを履いている。ヘミングウェイは田舎でニッカー・ボッカーズはいいが、ジェノヴァの国際会議では違和感があると報告している。

24. 「新しいギャンブル：テニス・タンブレロ ("New Betting Game: Tennis Tamburello")」(1922年5月9日号)：タンバリンを振る「テニス選手」がカーテンに描かれたどの四角いブロックにボールを当てるのかを賭けるテニス・タンブレロというギャンブルの流行を報告している。

25. 「ロイド・ジョージの魔術 ("Lloyd George's Magic")」(1922年5月13日号)：イギリス代表、ロイド・ジョージが混乱するジェノヴァ会議で採った懐柔策をヘミングウェイが賞賛する内容。

これらすべての記事が直接ジェノヴァ会議に関するものというわけではないが、短期間にこれだけの記事を書いていることはヘミングウェイのジャーナリストとしての旺盛な意欲を強く示しているといえるだろう。基本的にはドイツとソ連がラパロ条約を締結することで、会議自体が収束がつかなくなり、たいした成果も上げられずに終わっていく過程を報告している。

少なくともジェノヴァにおいては、ヘミングウェイの主たる興味の対象はイギリスのロイド・ジョージとソ連代表のチチェーリン<sup>注2</sup>であった。会議の舞台となったイタリアのファクタ首相にはあまり言及していないし、台頭しつつ

あったファシズムを記事にしたのも1本だけである。

一方アメリカ国内でのこの会議はどのように受け止められていたのであろうか。ジェノヴァ会議に関しては『ニューヨーク・タイムズ』も連日その模様を伝えていたが、ファシズム関連のニュースは4月10日、4月20日、5月22日と3回伝えられたのみである。ジェノヴァ会議とは別に、4月21日にトリエステにおけるファシストと共産主義者との抗争、5月25日のローマにおける衝突、5月28日はローマ、(5月19日に会議は終了しているが)ジェノヴァ、ボローニャ、トリエステなどの都市における抗争継続が報道されている。当時のアメリカ国内の関心もジェノヴァ会議に関しては、ソ連の国際舞台初登場とイギリス代表ロイド・ジョージやフランス代表バルトゥーの動向にあったと考えられる。ヘミングウェイの記事は多くのアメリカ世論と大差はないと考えられる。

ただし、前に述べたことと矛盾するようであるが、ヘミングウェイの内面でジェノヴァ会議でファシズムへの関心が生じたのも事実である。ソ連の代表、チチャーリンが出席したために、イタリア国内の共産主義勢力と反共産主義勢力(ファシスト)の抗争が引き起こされたこの会議を契機として次第にヘミングウェイのファシズムへの関心は高まっていったと考えられる。

## II ムッソリーニとの会見

1922年4月10日から5月19日にかけて開催されたジェノヴァ会議の取材の後ヘミングウェイはフランスへ戻る。ベイカーによると、ヘミングウェイはハドリーに求婚していた頃、イタリアでの体験を話題にしていたにも関わらず、未だにハドリーをイタリアへ連れて行っていないことを気にしていて、そのチャンスを探っていた(Baker 91)。ジェノヴァ会議取材でお金が貯まると、1922年5月中旬から1ヶ月かけてチンク・ドーマン＝スミス<sup>注3</sup>とスイスで落ち合っ



て、イタリアを旅することになった (Baker 91)。この旅でスキオ、ガルダ湖、メストレ、フォッサルタを再訪したのだが、どこもかつての面影は失われ、ヘミングウェイは大いに失望している (Baker 94)。しかし、スキオからフォッサルタに至るセンチメンタル・ジャーニーへ出かける前に、かつて治療を受けていたミラノの病院を訪れている。ミラノの美術館のバーで新聞を読み、ファシストのボローニャ襲撃を知り、さらにファシストのリーダーとなったムッソリーニがミラノに滞在していることを知ると、記者証を使って、会見することに成功した (Baker 92-93)。この旅の最大の収穫は、ヘミングウェイにとっての思い出の地再訪ではなく、ムッソリーニとの会見であったといえるだろう。

ムッソリーニとの会見に成功したヘミングウェイは「ファシスト党员 50 万人 (Fascisti Party Half-Million)」と「イタリアの黒シャツ (Italy's Blackshirts)」という 2 つの記事を書いている。

「ファシスト党员 50 万人」はムッソリーニとの会見に基づいている。ヘミングウェイはムッソリーニの容貌を "Mussolini is a big, brown-faced man with a high forehead, a slow smiling mouth, and large, expressive hands." (*Dateline: Toronto* 172) と描写して、次にムッソリーニ自身にファシズムの理念を語らせている。ヘミングウェイはムッソリーニの "We are a political party organized as a military force" (172) ということばを引用して、ファシスト党を定義する。ファシスト党は単なる政党ではなく、軍隊の機能をもつ政党なのである。さらに、ムッソリーニの "We are not out to oppose any Italian government. We are not against the law. But we have force enough to overthrow any government that might try to oppose or destroy us." (*Dateline: Toronto* 172) ということばを引用して、反対勢力に対しては暴力の行使も厭わないという立場を明らかにしている。他にもファシスト党を "extreme conservatism" (*Dateline: Toronto* 172) あるいはムッソリーニを "renegade Socialist" (*Dateline: Toronto* 173) と説明している。ヘミングウエ

イはさらにファシストの反共産主義的立場を明確にし、最後に "The question is now, what does Mussolini...intend to do with his 'political party organized as a military force'?" (*Dateline: Toronto* 173) と疑問を投げかける形で終わっている。

「イタリアの黒シャツ」では "The Fascisti, or extreme Nationalists, which means black-shirted, knife-carrying, club-swinging, quick-stepping, nineteen-year-old potshot patriots, have worn out their welcome in Italy." (*Dateline: Toronto* 174) と述べて、暴力を手段とするファシズムが支持を失って、より過激な集団と化していく様子を伝えている。特に5月下旬に起きたボローニャを襲撃した様子を伝えている。当時ボローニャには社会主義者、共産主義者などの急進的思想を抱く人が多く、ファシストは当然のことながら左翼の勢力拡大を抑え込もうとした。ファシストの行動を "lawless" (*Dateline: Toronto* 174) と形容することで、控えめながらヘミングウェイの批判が読みとれる。

ここでムッソリーニがファシズムという政治形態を生み出すに至ったプロセスを追っておきたい。ムッソリーニは1883年ローマに生まれた。ムッソリーニは父親が社会主義者であったため、最初社会主義思想の影響を受け、教師をしていた。その後、オーストリア領トレントの労働会議所書記となり、『ポポロ』編集に従事していた。トレントは当時オーストリア領であったが、昔からイタリア人が多く住み、イタリアの文化が色濃く、イタリアに帰属すべき土地と考えられていた。他のヨーロッパ諸国に比べるとようやく統一されたイタリアにはトレントを取り戻せという気運が高まっていた。<sup>註4</sup> またガブリエーレ・ダンヌンツィオの愛国主義的文学にも出会い、ムッソリーニは社会主義者でありながら、民族主義的思想をも身につけていった。ローマに戻ると、社会党の書記となり、指導部に選出され、社会党機関紙『アヴァンティ（前進）』の編集長となる。しかし、第1次世界大戦への参戦論を唱えたため、党を追わ

れる。1919年3月、ムッソリーニは参戦勢力の一部とともにミラノで「戦闘ファッシ」を結成する。ここからムッソリーニは社会党と敵対し、1921年11月にはファシスト党結成大会を開催し、戦闘突撃隊を結成して、一つの政党が軍隊の機能をも備えるようになった。

ムッソリーニの経歴から考えると、全体主義は社会主義と民族主義から生まれたと考えられる。第1次世界大戦を契機として、ロシア帝国、オーストリア・ハンガリー帝国及びオスマン・トルコ帝国などの帝国主義国家が相次いで崩壊した1910～1920年代の西欧社会においては、共産主義や全体主義という二つの新しい政治形態は極めて新鮮で、世界中の注目を集めていたと推測できる。<sup>注5</sup>

フェントンが "The majority of American estimates of Mussolini, with the notable exception of a New York *World* series by Bolitho, were distinctly enthusiastic and admiring. (282) と述べているように、実際アメリカ国内ではムッソリーニは1920年代前半は好意的に受け入れられていたようである。たとえば、1922年10月28日ムッソリーニは一般にローマ進軍と呼ばれるクーデタを起こした。国王ヴィクトール・エマニュエル3世はファクタを首相から降ろしサランドラを後継主犯に指名する。サランドラはムッソリーニに4つの閣僚ポストを提供すると申し出るが、ムッソリーニは拒否する。サランドラは辞職し、国王はただちにムッソリーニに組閣要請を出し、ムッソリーニは遂に30日政権の座に着く（木村 98-99）。政権奪取には暴力を利用しているが、『ニューヨーク・タイムズ』を読む限りでは、次のように暴力行使、クーデタに対する批判は見られない。

King Yields to "New Spirit."

Deputy Ci Vecchi, one of the supreme military authorities of the Fascisti party, had an important interview with the King today. He insisted on the highly patriotic aims of the Fascisti, who, he declared,

had no intention of upsetting the institutions of Italy or the monarchical regime, only wishing to cleanse Italian public life and infuse a new spirit.

In so saying Signor Di Vecchi showed intense emotion, and the King also was much moved. He embraced Di Vecchi, declaring that, while scrupulously observing the Italian constitution, he would give Italy a government most suited to the new spirit pervading the country. (*The New York Times* 1922年10月30日1)

ここでは批判よりもむしろ "a new spirit" ということばを3回繰り返して、ムッソリーニの政治をイタリアにできた新しい政治形態と捉えているようである。

『ニューヨーク・タイムズ』10月31日の記事では、"ROME IN FEVER OF DELIGHT" と小見出しを付け、ムッソリーニの政権獲得を "Fascisti revolution" と呼び、さらに国民の前に姿を現したムッソリーニのことばを引用しながら、次のように書いている。

"Today Italy has not only got a Cabinet but (here he pronounced his words very slowly with great emphasis and distinctness), she has also got a Government, a strong Government, such as she has needed for many years past, but never obtained."

These words were greeted with delirious enthusiasm, which caused Mussolini to appear three more times, waving his hand to the crowd. (*The New York Times* 1922年10月31日1)

『ニューヨーク・タイムズ』11月3日の記事では "MUSSOLINI STARTS

DRASTIC REFORMS" という見出しの記事では、"New Ideas Find Favor" と小見出しを付けて、ムッソリーニの新しい考え方を受け入れる国民の声が紹介されている。

An expression which is continually heard on all sides:

"I do not know whether Mussolini is right or wrong, but at least we now have in the Government a man who has some new ideas. All the old ideas have failed. They certainly cannot work worse than the old ones." (*The New York Times* 1922年11月3日7)

以上のようにイタリア国内では熱狂的な歓迎を受けたのである。『ニューヨーク・タイムズ』は何らコメントしていないし、アメリカの反応も特に報告されてはいない。以上のことを考えると、前に述べたフェントンの引用にあるように、アメリカではムッソリーニは肯定的に評価されていたと考えられる。

第1次世界大戦後の世界では、帝国主義が崩壊し、新しく共産主義国家が誕生すると同時に各国に民族主義的な自覚が生まれてきていた。イギリスの帝国主義支配から独立を勝ち取ったアメリカ人の中には帝国主義、植民地主義への反発が強く、逆に帝国が相次いで崩壊した後の新しい政治形態としてのファシズムに期待を寄せ、歓迎していたようである。2003年のアメリカならば、ムッソリーニはサダム・フセインと並ぶ独裁者としてアメリカ国民の批判を浴びていたことであろう。しかし、1920年代前半のアメリカではムッソリーニはイタリアの改革者として受け入れられていたのである。

### Ⅲ ローザンヌ会議

ジェノヴァ会議でファシストと коммуニストの衝突を目撃し、さらにミラノ

でムッソリーニに会見したことでファシズムへの関心は深まっていったが、はっきりと反ファシズムを宣言するようになったのはローザンヌ会議においてである。

ローザンヌ会議とは1922年11月から1923年7月までの間、連合国とトルコとの間に行われた講和会議である。この会議が開かれるきっかけはトルコ国内の政治体制の変化である。第1次世界大戦後連合国とトルコのスルタン政府の間で1920年8月に結ばれたセーブル条約はトルコにとって、きわめて過酷なものであった。後にトルコ共和国初代大統領となるケマル・アタチュルクらは独立戦争を起し、イギリスその他に支援されたギリシア軍を破り、スルタン政府を廃した。新しくトルコの代表となったケマル・アタチュルクの意向を汲んで開かれたローザンヌ会議は1923年7月、ローザンヌ条約の締結を導き、ケマル・アタチュルクはセーブル条約の屈辱的規定を大幅に改定させることに成功した。

ヘミングウェイは、ギリシャ＝トルコ間紛争を解決するためのローザンヌ会議を取材するようというトロント・スター社ジョン・ボーンからの要請で、ローザンヌを訪れることになった (Fenton 187, Baker 102)。

取材報告として『トロント・デイリー・スター』に「ヨーロッパの山師、ムッソリーニ (Mussolini, Europe's Prize Bluffer)」(1923年1月27日)と「ロシア人の制服 (Russian Uniforms)」(1923年2月10日)という記事を書いている。ムッソリーニとの関連で問題になるのは、前者であるのは言うまでもない。この記事でヘミングウェイは、ミラノ会見記事の控えめな表現と異なり、ムッソリーニをあからさまに批判している。記事ではソ連代表チチェリンやトルコ代表イスメット・パシャ (パシャはオスマン＝トルコ帝国時代、スルタンが高級官僚や軍司令官などにあたえた称号) の外見・様子を紹介した後に、フランス語が苦手であることを隠そうともせず、ジョークが好きで社交的なイスメット・パシャと比較するように、ムッソリーニを次のように紹介している。

In contrast to Ismet there was Mussolini. Mussolini is the biggest bluff in Europe. If Mussolini would have regard him as a bluff. The shooting would be a bluff. (*Dateline: Toronto* 64)

ここでは強い調子で、ムッソリーニを批判している。さらに、2つのエピソードを紹介しているが、どちらも辛辣である。ひとつは記者団がインタビューにやってきたときに取った態度である。

The Fascist dictator had announced he would receive the press. Everybody came. We all crowded into the room. Mussolini sat at his desk reading a book. His face was controlled into the famous frown. He was registering Dictator. Being an exnewspaper man himself he knew how many readers would be reached by the accounts the men in the room would write of the interview he was already reading the lines of the two thousand papers served by the two hundred correspondents. "As we entered the room the Blacj Shirt Dictator did not look up from the book he was reading, so intense was his concentration, etc.

I tip-toed over behind him to see what the book was he was reading with such avid interest. It was a French-English dictionary - held upside down." (*Dateline: Toronto* 64)

もともとジャーナリストで、新聞記者の心理を知ったムッソリーニのイメージ戦略はヘミングウェイによる最後のセンテンスで打ち砕かれる。フランス語の辞書を逆さまに読んでいたというエピソードが真実かどうかは、今となっては判断できないが、イスメット・パシャがフランス語ができないことをそれほど気にせずに率直に振る舞う態度と比較されている。ヘミングウェイの中に文学

者と芸術家をファシズム運動の中に取り込んで、文化人気取りでいるムッソリーニを批判しようとする気持ちは読みとれる。実際ムッソリーニは演説に文学や絵画の知識を盛り込んで、大衆を扇動していったからである。またムッソリーニに利用された芸術家はガブリエル・ダヌンツィオ<sup>注6</sup> や劇作家ルイジ・ピランデロだけではない。当時の前衛芸術集団未来派はファシズムに取り込まれていったことはよく知られている (Palla 65-66)。未来派もファシストも保守的なブルジョワ的価値観に対立するという意味で共通性があり、未来派はファシストを支持していったのである (Ridley 205)。

もう一つは、ローザンヌ在住のイタリア人の女性たち (労働者階級の妻たち) がムッソリーニに花束を捧げる目的で部屋を訪れたときに見せた尊大な態度である。ヘミングウェイは、"Mussolini had registered Dictator." (*Dateline: Toronto* 65) と表現している。

#### IV アメリカ社会におけるムッソリーニ受容とヘミングウェイの立場

アメリカ国内でファシズムが批判されない理由として、アメリカ国民のイタリアに対する関心の浅さが挙げられる。イタリアからの移民は20世紀になって増加していたが、イタリア系は快く受け入れられていたわけではない。むしろ、1920年のサッコ・ヴァンゼッティ事件に見られるように、差別・偏見の対象となっていた。ムッソリーニの言動、ファシストが引き起こした事件などは報道されていたが、それほど注目されていたわけではないようである。

アメリカ国内でムッソリーニ、ファシズムがそれほど批判されず、むしろ好意的に評価された理由は、共産主義との関係にある。何よりもファシスト党は反共産主義を明確に打ち出している。

史的唯物論の立場に立つ共産主義は、基本的に宗教を否定している。マルクスは『ヘーゲル法哲学批判序説』において「宗教上の悲惨は、現実的な悲惨の表現でもあるし、現実的な悲惨にたいする抗議でもある。宗教は、抑圧された



生きものの嘆息であり、非情な世界の心情であるとともに、精神を失った状態の精神である。それは民衆の阿片である。」（マルクス 72）と述べて、宗教は幻想で人を酔わせ、惑わすだけだと否定する考え方を示している。

歴史的に見れば、アメリカはプロテスタントが作った宗教国家である。キリスト教の価値観が強いアメリカ社会では、無神論の共産主義に対する警戒心は現在われわれが想像する以上に強い。一方では物質文明の強いアメリカではあるが、聖書の教えを文字通りに解釈するキリスト教根本主義の根強い地域も存在し、ダーウィンの進化論を公立で教えることを禁止する州も存在するのである。たとえば1925年テネシー州では進化論を教えることを禁止した。これに続いてフロリダ、オクラホマ、ノース・カロライナ、アーカンソー、ミシシッピなどの州で進化論は禁止されてきた。しかしこれを過去の出来事と考えるのは間違いである。21世紀目前の1999年カンザス州教育委員会では進化論を公立学校のカリキュラムから外すことが決定された。またアメリカでは1920年から33年にかけて禁酒法が施行された。禁酒の思想はプロテスタントの倫理に基づいている。禁酒法が廃棄された後も禁酒法が郡レベルでは実施されている所も存在する。このようにアメリカ社会における宗教（特にプロテスタンティズム）の重みは日本人の想像をはるかに超越しているのである。宗教を重視するアメリカでは、無宗教あるいは無神論の共産主義者が世界の覇権を握るのは決して許されることではなかったし、現在でも許されていない。

1920年代アメリカでは司法長官パーマーが赤狩りを行い、左翼は弾圧されていた。このような状況では共産主義国家ソ連はアメリカ社会では受け入れられないのである。ビート詩人アレン・ギンズバーグの母親ネィオミ・ギンズバーグは、『カディッシュ』で描き出されているように、ユダヤ系ロシア人の移民で共産主義者であったため、アメリカ社会に適応できず排除され、結果的に精神のバランスが崩壊してしまう。

以上述べたように、アメリカ社会では無神論的共産主義は歓迎されないため、

イタリア国内の共産主義に対抗するファシストは、その暴力的側面はほとんど無視されて、ファシズムはむしろ歓迎されていたと推測できる。

ベイカーが "Ernest quickly revised his former opinion of Benito Mussolini" (103) と述べているように、ヘミングウェイがムッソリーニに対する考え方を変えてしまったのであろうか。ベイカーによるとヘミングウェイはローザンヌにおいて、南アフリカ国籍で『マンチェスター・ガーディアン』の特派員記者ウィリアム・ボリトー・ライアルと出会い、政治観が変わったと述べている (102)。チャールズ・A・フェントンはライアルが国際政治の師であると認めていると述べている (192-93)。しかし、ミラノの会見においてすでにファシズムの脅威とムッソリーニの危険性を感知していたとも考えられる。ミラノ会見は表面的には客観的ながら、ヘミングウェイ流の控えめな表現で、ファシズムの脅威を伝えていたとは考えられないだろうか。ヘミングウェイの変化はローザンヌで突然起きるのではなく、ミラノでの直接会見時点ですでに胚胎していたのではないだろうか。

ローザンヌ会議以降、ムッソリーニはさらにその権力を強大にしていき、政敵を暗殺・あるいは逮捕していった。社会党議員マッテオッティは1924年5月30日、国会で、前月行われた下院選挙でファシストが犯した不正行為、暴行・恐喝の事実を暴露した。その結果、6月10日登院の途中に襲われて拉致され、行方不明となり、2か月後彼の死体がローマ郊外で発見された。この事件にはヘミングウェイも憤りを覚えたようである (Meyers 97)。共産党員アントニオ・グラムシは国会議員でありながら、1926年11月逮捕され、獄中で身体を著しく衰弱させ、1937年死亡している。

## 結 論

以上見てきたように、反共産主義的立場から共産主義を弾圧するファシストを支持していたアメリカの世論とは一線を画し、フランコもヒトラーも現れて

いない時期に、ファシズムを脅威に感じ、ファシズムを独自に批判したヘミングウェイは先見の明があったということになる。

## 注

1. FBIの報告書では調査は1942年10月8日から1955年4月9日まで及んでいる。1942年12月17日の報告では次のように記されている。

Hemingway, it will be recalled, engaged actively on the side of the Spanish Republic during the Spanish Civil War, and it is reported that he is very well acquainted with a large number of Spanish refugees in Cuba and elsewhere. Hemingway, it will be recalled, joined in attacks the Bureau early 1940, at the time of "general smear campaign" following the arrests of certain individuals in Detroit charged with violation of Federal statutes in connection with their participation in Spanish Civil War activities. It will be recalled that Hemingway signed a declaration, along with a number of other individuals, severely criticizing the Bureau in connection with the Detroit arrests. Hemingway has been accused of Communist sympathy, although we are advised that has denied and does vigorously deny any Communist affiliation or sympathy. (*FBI File 6*)

柴山哲也が指摘するように、スペインからのキューバへの亡命者は当時アメリカのキューバ支配に協力的なバチスタ政権とアメリカ政府にとっては危険な存在となる可能性があったのだ（柴山 43-44）。さらに次のように別の報告書においても、ヘミングウェイと共産主義者の接点が報告されている。1943年4月17日付けでは "Mr. Hemingway, it will be noted, has been connected with various so-called Communist front organizations and was active in aiding the Loyalist cause in Spain." (*FBI File 16*) と報告され、1943年4月27日付けでは "In the fall of 1940 Hemingway's name was included in a group of names of individuals who were said to be engaged

in Communist activities." (*FBI File 28*) と記述されている。

2. ヘミングウェイのロシア（ソ連）への関心が出ている。経済復興問題がこの会議の中心であったにもかかわらず、多くの特派員記者の注目を集めたのはソ連の代表団であった。後に FBI がヘミングウェイを共産主義者ではないかと疑い、執拗に追いつめていくことを考えると、ここで共産主義者と出会ったことは今後検討を要することになる。
3. ヘミングウェイが負傷した後、ミラノで治療を受けていた頃からの親友のアイランド人。
4. イタリアはガリバルディによって統一をはたしたが、ムッソリーニが生まれた 1880 年代から近代化に遅れたイタリアでは愛国心育成によって、英仏などの国々に追いつこうという気運が国民の間では高まっていた。『クオーレ』(*Cuore*, 1886) について、藤澤房俊は『『クオーレ』にこめられた愛国心の育成や犠牲・勇気・思いやりといった新しい価値観の創造は、一九世紀イタリアの国民形成における至上主義であったし、そのような愛国心・価値観は二〇世紀のファシズム・イデオロギーにもつながるものであったことは言うまでもない』(10)と述べている。19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてイタリア国民感情にムッソリーニはうまく乗っていったといえるだろう。
5. 第 1 次世界大戦のきっかけとなったのは、1914 年 6 月 28 日サラエヴォでオーストリア皇太子夫妻が民族主義に目覚めたセルビア人によって暗殺された事件である。この頃から民族独立という動きが世界中に現れ始めていた。
6. ヘミングウェイが "Gabriele D'Annunzio, who hates him" (*Dateline 64*) と書いているように、ダヌンツィオはムッソリーニとは距離を置いておきたいと思っていたようであるが、結局はファシストに支持される形で、取り込まれている (*Palla 66*)。

## 参 考 文 献

- Baker, Carlos. *Ernest Hemingway: A Life Story*. New York: Charles Scribner's Sons, 1969.
- FBI Files: Ernest Hemingway*. (CD-ROM)
- Fenton, Charles A. *The Apprenticeship of Ernest Hemingway*. New York: Farrar, Straus & Young, 1954.
- Hemingway, Ernest. *Dateline: Toronto: The Complete Toronto Star Dispatches, 1920-1929*. Ed. William white. New York: Charles Scribner's Sons, 1985.
- Kobler, J.F. *Ernest Hemingway : Journalist and Artist*. Ann Arbor: UMI Research Press, 1985.
- Meyers, Jeffrey. *Hemingway: A Biography*. New York: Perennial Library, 1985.
- The New York Times*. (マイクロフィッシュ)
- Palla, Marco. *Mussolini and Fascism*. New York: Interlink Books, 2000.
- Ridley, Jasper. *Mussolini: A Biography*. New York: Cooper Square Press, 2000.
- Smith, Denis Mack. *Mussolini*. London: Phoenix Press, 2001.
- 木村裕主 『ムッソリーニ：ファシズム序説』 清水書院, 1996.
- 柴山哲也 『ヘミングウェイはなぜ死んだか：二十世紀の原罪に挑んだ男』 朝日ソノラマ, 1994.
- 藤澤房俊 『「クオーレ」の時代：近代イタリアの子供と国家』 筑摩書房, 1998.
- マルクス, カール 『ユダヤ人問題によせて/ヘーゲル法哲学批判序説』 城塚

— 1680 —

登録 岩波書店, 1999.